

六ぴきのうさぎ

昔むかし、ある湖みずうみのほとりに椰子ヤシの木の森がありました。この森に、うさぎが六ぴき住んでいました。

あるとき、椰子の実がひとつ水に落ちて、ボタンと音を立てました。六ぴきのうさぎはびっくりしてにげきました。うさぎたちが走つていくと、きつねに会いました。「どうしてそんなにあわてふためいて走つてるの」と、きつねがきました。うさぎたちは、

「あそこで『ボタン』って声がしたんだ」と答えました。それを聞くと、きつねもあわててかけだしました。

うさぎたちときつねが走つていくと、さるに会いました。

「どうしてそんなにあわてふためいて走つてるの」

「あそこで『ボタン』って声がしたんだ」と、きつねが答えました。それを聞くと、さるもいっしょにかけだしました。

うさぎたちときつねとさるが走つていくと、めじか雌鹿に会いました。

「どうしてそんなにあわてふためいて走つてるの」

「あそこで『ボタン』って声がしたんだ」と、さるが答えました。そこで、雌鹿もいっしょにかけだしました。

うさぎたちときつねとさると雌鹿が走つていくと、こんどはぶたに会いました。

「どうしてそんなにあわてふためいて走つてるの」

「あそこで『ボトン』って声がしたんだ」

そこで、ぶたもいっしょにかけだしました。うさぎたちときつねとさると雌鹿とぶたが走つていくと、かもしかに会いました。

「どうしてそんなにあわてふためいて走つてるの」

「あそこで『ボトン』って声がしたんだ」

かもしかも走りだしました。

こうして、ぞうも、くまも、馬も、とらも、みんなあわてふためいてにげていきました。

山の近くまで来ると、王さまのようなたてがみのライオンに会いました。ライオンは、動物たちが走つてくるのを見ていました。

「おまえたち、どうしてそんなにあわてふためいてにげてるんだ。みんな、強いけづめやきばを持つているじゃないか」

すると、みんなはいいました。

「あそこで『ボタン』って声がしたんです」

ライオンは、

「その『ボタン』っていったのは、いったいなんだね。そいつはどうじやないだね」ととききました。みんなは、「それは知らないんです」と答えました。

「じゃあ、そんなにあわてふためいてにげることはないよ。まあ調べてみようじゃないか。おまえたち、それをだれから聞いたんだね」

ライオンがきくと、みんなは口ぐちにいいました。

「どうです」

「馬です」

「くまです」

「ぞうです」

「かもしかです」

じゅんばんにききただししていくと、しまいにきつねがいいました。

「六ぴきのうさぎに聞いたんです」

ライオンはうさぎたちに、

「おまえたちがその声を聞いたのかね」とたずねました。

「ええ、ぼくたち、そのおそろしい声をはつきり聞いたんです。こっちです。『ボタン』つていったやつを見てください」

六ぴきのうさぎはそういうて、ライオンを椰子の木の森までつれていきました。みんなもいつしょについてきました。

「ほら、ここで、『ボタン』が聞こえたんです」

うさぎがそういったとたん、椰子の実がまたひとつ落ちてきて、ボタンと水に落ちました。ライオンは、

「なんだ。あれは椰子の実が水に落ちる音じゃないか。こんなことでおどろくんじゃないよ」といいました。

すると、神さまの声が聞こえました。

ただのうわさで動くものではない

目をしっかりと見て、自分の目でよく見るのだ

椰子の実が落ちただけでも

森じゅうのけものがにげだすこともあるのだから

出典 『語りの森昔話集1おんちよろちよろ』村上郁再話

原話 『世界の民話21』小澤俊夫訳／ぎょうせい